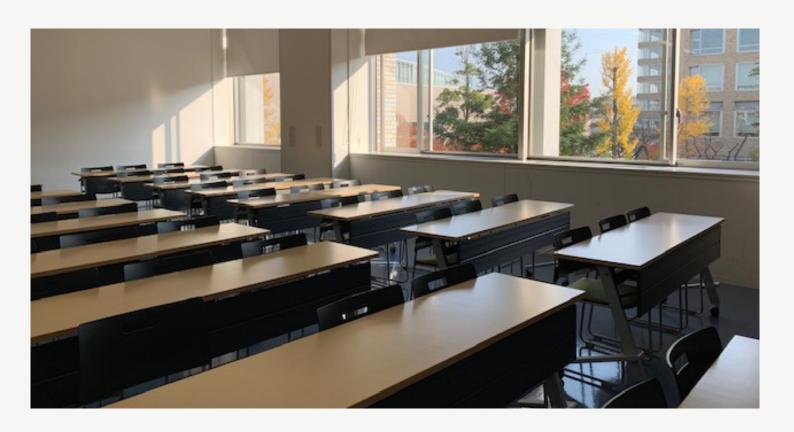
2020.11.18 第3回研究会 NEWS LETTER

国際教養学部 言語文化学科



<研究会の予定>

2020年度

第4回研究会 1月29日(金曜) 14:30~15:30 発表者 浅山佳郎 第5回研究会 3月18日(木曜) 13:35~15:00 発表予定者 堀川宏

2021年度 春学期

第6回研究会 4月28日(水曜) 15:30~17:00 発表予定者 未定第7回研究会 5月26日(水曜) 15:30~17:00 発表予定者 未定第8回研究会 6月30日(水曜) 15:30~17:00 発表予定者 未定

発表後の「言い残し/聞き残し」対談



発表者:平田彩奈惠講師 研究会監事:浅山佳郎

なかなか大学に気ままに出るというわけにはいかない状況なので、 今回の発表後の「言い残し,聞き残し対談」は,メールによる「遠隔 対談」となりました。

浅山:まず最初に、いつものことですが、門外漢にも「見取り図」ができるように、学会についてお伺いしたいと思います。

平田:日本文学の学会は,すべての時代を網羅する全国規模の学会もありますが,その他にはおおまかに言って「時代」による区分と,「扱う作品のジャンル」による区分で成り立つ学会があり,時代区分による学会がそれぞれの研究者にとって「主要な」所属学会であると認識されていると思います。

たとえば私の専門は平安文学ですので、中古文学会に所属しています。近代以前では、上代・中古・中世・近世という区分で学会があります。全時代を扱う学会では当然、他の時代の研究発表にも触れることができますが、時代ごとの学会を網羅している人はあまりいないのが実情だと思います。

また、ジャンルというのは、和歌が専門の方は和歌文学会、説話が専門の方は説話文学会、といった区分です。ただ、これはどんなジャンル・作品についてもあるわけではなく、規模もさまざまです。

浅山: 『源氏物語』と同時代的な和歌を重層化させるという今回の先生の試みは,たいへん面白くうかがいましたが,そうしたご研究の方法論は,現在の日本古典文学研究のなかでは,どのような位置あいにあるとみればいいのでしょうか。先生のご研究について,現在の日本古典文学研究においてどのような理論や研究法が中心的なのかといった事とからめてお話しいただけるとありがたいです。

平田:率直に申し上げて,私自身,どのように研究の軸足を定めたものか悩んでいるというのが現状です。和歌や,和歌的背景を持った歌ことばを物語(散文)の中に取り入れることは,表面的な言葉の意味あいにもう一つの流れを加える手法です。

それが物語読解にどのような意味を与えるのか,また,「作者」がどれだけ和歌の知識を持っていて,その周辺ではどのような歌ことばがどのようなニュアンスをもってもてはやされていて,といった「作者」側の意図や制作環境を明らかにする必要もあると思いますし,実際にそのような観点からの研究もあります。

特定の和歌を引用していることが明らかである場合は,とくに問題なくそういった手法で研究を進められますし,査読などではやはりそういった「正確にそうと言えるもの」が重視されるのですが,私が注目しているのはもう少しぼんやりとした,と言いますか,その当時の人々が共有していたであろう感覚,歌ことばに対するイメージを含めた和歌的表現です。

そういったものを作者の意図とは論して論して論」のを作者の意図とは論」ので読者論」が難している。一見消極のでは一見消極のではでいてはいるではでいますが、「ないではないではないではないではいいでは、ではいる場合をある。とはいる場合である。といるはいと思ったがあるに進めてみたいと思ったはあったいと思ったはあったいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったがあるに進めてみたいと思ったいます。

浅山:作品を単独で研究対象とするのではなく, さまざまな重なり合いとの関係の中で研究するとすると,特に『源氏物語』などは,本居宣長のように「日本」そのものを問う理念や主張の例も思い起こされますが,先生のご研究は,遠い射程としては,どういった問題をとらえていらっしゃるのか,もしよければお聞かせください。



平田:和歌や歌ことばに限らず,その作品以前に存在していた作品の表現等を取り入れていることは,その作り手とある程度共通の知識や感覚がなければ理解できません。だからこそ,共通の知識基盤を持っていない状況になると,そういった表現の理解が難しくなります。

『源氏物語』の古注釈では,引歌を探そうと試行錯誤している様が鎌倉時代から見られます。『源氏物語』自体の研究としては,このように時代によって異なる共有知識をふまえながら,同じ表現でもどのような理解の違いが生じているのかを,「誤った解釈」とはせずに見てゆけたらと考えています。

一方で,現代で「日本の古典文学を素材にした」小説,漫画,演劇作品などが娯楽として供給されていることにも関心を持っています。





特に本学部は、学士号を「外国文化」で出すように、異文化と異言語の知識とそれに対する柔軟性を獲得することを目的としたカリキュラムをつくっています。その中で「日本学」はどのようなものとしてあるのかといった点についてのお考えをお話しください。

平田:前任校をふくめ,学生さんと話しているときに,「国際的に活躍したいので,日本文化を知っていないといけないと思った」ということをよく言われます。私自身は学生時代,好きな学問にまっしぐらに突き進んでいただけなので(日本文学を専攻する以外の選択肢は考えなかったのに,第二外国語に中国語を選ばずにイタリア語を選ぶなど,まったく計画性がないにもほどがある学生でした),意識が高いねえと素直に感心してしまいますが,一方で「日本文化」を「知っている」ことってどういうことなのだろう,と意地悪な質問を返すことも多々あります。日本文学を専門に研究していても,「日本文化について授業をしてください」と言われるとひるんでしまう自分がいます。はじめの学会の話ともかかわりますが,日本文学の研究は非常に細分化されています。それほど大量の資料があり,研究の歴史があるということですが,それは,今,日本にいるから実感できることなのだろうと思います。



もちろん,日本の文学・歴史について一通りの知識を身に着け,説明できることは「プチ日本代表」として扱われる留学の機会などで重要だろうと思いますし,この学部で日本研究部門がある意義の一つだろうと思いますが,真に重要なのは「自分が立っている場所の文化も分からないことだらけだ」という実感なのかなと思います。

それは,学生がそれぞれ関心を持つ外国文化についても「分かった気にならない」ことにつながるのではないか,と。そして,身近な日本文化の「なぜ」を突き詰めることは,海外の文化を学ぶ取っ掛かりにもなりうるだろうと思います。

浅山:最後に,本学部における「日本研究」が,学生にとってどのようなものであるのが望ましいとお考えでいらっしゃるか,日本文学の魅力なども合わせて,おおまかなところをお話しいただきたいと思います。

平田:先にも申し上げたように,海外に関心のある学生が多い国際教養学部において,日本研究は「学ばねばならないもの」と捉えられがちなのかなと思います。まずはそういった堅苦しさを取り払って,純粋に「おもしろい」ものだと思ってもらえる分野であれたら,と。自分が住んでいる国の文化が魅力的だと思えないのは単純に寂しいなと思うので。

今年度着任し、もうすぐ一年目の授業が終わろうとしていますが、現代の漫画作品と古典のかかわりを考える回が楽しいと感じる学生もいれば、『源氏物語』の特定箇所の解釈を専門的に掘り下げた回が楽しいと感じる学生もいて、身近だから良いとも、専門的だから良いとも言えないのだなと実感しています。だからこそ、さまざまなアプローチから「おもしろさ」を発信できるように心がけたいなと思っています。その上で、学生が気になったことを関連付けて突いていく機会がある場所として機能できれば理想的です。

たとえば、私が専門にしている『源氏物語』の主人公、光源氏に対しては「イケメンで女好き」というイメージにとどまっている学生が多いのですが、授業で細かく読んでゆくと大体、光源氏に対する猛バッシングが始まります。学生からしてみれば不快感を覚えているわけですが、『源氏物語』が「教わったもの」から「自分が感じ取ったもの」に変化した瞬間であり、そうなると、さまざまな読書経験と結びつけて「この作品と似ていると思った」という発言なども出てきます。

日本文学に限った話ではありませんが、物語や「つくりごと」の世界は、自分の中に無限に積み重ねることができる経験になる点が魅力だと感じています。また、卑近な話ではありますが、出歩くのが楽しくなることも魅力です。私が古典文学を専攻したいと思ったのは、高校の課題で額田女王についていくつか文献を読んだ後、祖父が住んでいた奈良を訪れた際にそれまでとは景色が違って見えたことがきっかけでした。いわゆる「聖地巡り」という感覚でしょうか。

海の向こうの遠くに想いを馳せることも素敵ですが、1000年以上昔の作品の舞台にさえ、気軽に自分の足で歩いてその空気感を感じられるのが日本にいて日本文学を読む強みだと思います。そんな感覚を学生と共有できる文学散歩なども、今の状況が落ち着いたらしてみたいなと思っています。